



全教北九州

新聞 全教北九州

全教北九州市教職員組合

2026年1月30日

全教北九州

検索

年末年始のとりくみ 特集

この新聞はすべての教職員に配布しています

教育は人と人を結び、過去と未来をつなぐ営み

「戦後の終焉」



全日本教職員組合（全教）

中央執行委員長 檀原毅也

被爆・戦後80年の昨年は、二度と核兵器は使用しない、戦後をさらに続けるという当たり前の願いが、不気味な影に覆われ、むしろ「戦後の終焉」とも呼ぶべき状況のようになります。稀代の悪法である治安維持法の制定百年、廃止80年を経て、スペイ防止法に執着する政黨が複数現れ、政権与党も同調する、という事態も生じています。

存立危機事態についての不用意な発言がきっかけで対立が深まっていることがわかついても、撤回することなく、持論に固執する首相のもとで、戦後日本社会が築いてきた平和主義や民主主義など、憲法の理念が著しく損なわれつゝあるのではないかでしょうか。

希望はどこにあるか

そんななかにあって、私たちはこの状況にしつかりと異議申し立てするとともに、希望を語り続けねばならないと思います。その希望はどこにあるか。

ひとつは、教育という営みそのものです。日々、子どもたちが、言葉や振る舞いで投げかけてくる問い合わせに、教職員は向き合い、応答します。教育は人と人を結び、過

全教といつ希望

新自由主義があおられようとも、孤立や分断を乗り越え、社会をつくる人間的な営みです。一方、私たちは教育の場が容易に人々を抑圧する装置になりかねないことを知っています。だから、教育のあり方を問い合わせ、冷静に考えあうことが必要です。私たちが教育大運動1741を重視する所以です。そして、希望は、さまざまに困難を抱え、悩みながらも子どもたちに向き合う教職員をつなぐ一人

教職員の処遇改善をゴイツしよに

全教北九州市教職員組合 年頭のごあいさつ

2025年はせんせいの学校の開校式に始まり、バスハイク、プロ野球観戦など、例年にも増してみんなさんと遊び、笑顔になる機会を持つことができました。一方でハラスメント相談もあり、今も対応中です。集まれば現場の忙しさや働きにくさなどが語られ、教職員の処遇改善が早急に求められます。

ところが、昨年改正された給特法は、教職員の処遇改善どころか「このままでは学校がもたない！」状況に拍車をかける法律となりました。1月から教職調整額は4%減となりました。

1991年3月6日、「私たちは、全国100万教職員の要求実現のため、その中核となつてたたかう」と行動綱領に記して全教はスタートしました。2026年は、すべての職場で組合加入を働きかけ、情勢を前向きに動かす1年にします。

2025年はせんせいの学校の開校式に始まり、バスハイク、プロ野球観戦など、例年にも増してみんなさんと遊び、笑顔になる機会を持つことができました。一方でハラスメント相談もあり、今も対応中です。集まれば現場の忙しさや働きにくさなどが語られ、教職員の処遇改善が早急に求められます。

全教北九州市は、仕事と子育て・介護が両立でき、自分の生活も大切にできる働き方を目指して、教育委員会交渉、学習会などに取組んでいきます。職場の仲間を増やし、働きやすい職場にしていきます。

このままでは学校がもたない！」状況に拍車をかける法律となりました。1月から教職調整額は4%減となりました。

ところが、昨年改正された給特法は、教職員の処遇改善どころか「このままでは学校がもたない！」状況に拍車をかける法律となりました。1月から教職調整額は4%減となりました。

全教北九州市は、仕事と子育て・介護が両立でき、自分の生活も大切にできる働き方を目指して、教育委員会交渉、学習会などに取組んでいきます。職場の仲間を増やし、働きやすい職場にしていきます。

このままでは学校がもたない！」状況に拍車をかける法律となりました。1月から教職調整額は4%減となりました。

女子挺身隊宿舎(1)
小倉南区

北九州の戦争遺跡

学び合い、語り合い、つながりあおづ

1/10・11 障害のある子どもの教育を語り合つ全国学習交流集会

2026年1月10日、11日の2日間、千葉県で「第25回障害のある子どもの教育を語り合つ全国学習交流集会」が開催されました。通常学級の教員や保護者が多数参加する「垣根を越えた学び」の場となつた本集会は、2日間でオンライン参加を合わせてのべ約860名が参加、全教北九州からも2名が参加しました。ここでは印象に残つた5つの視点を紹介します。

主役は子どもたち

集会のオープニングを飾つたのは、特別支援学級の子どもたちによる「よきこい」のステージでした。広い舞台の上で、一人ひとりが自分の「得意技」を喜びと自信に満ちた表情で披露してくれました。子どもたちが楽しみながらやっていることが伝わり、見ているこちらも樂しくなるステージでした。

理解されなくて困っている子

私たちほつ、目の前の「困った行動」をいかに直すか、という発想に陥りがちです。しかし、その行動の裏には、どんな満たされない思いや、伝えられないSOSが隠れているのかを理解する必要があります。

また、私たちが「即意見・指導」をしてしまう背景には、時間や心の「余裕のなさ」があると、いう現状も指摘されました。忙しさの中でも一步立ち止まり、まず理解しようと努めること。この姿勢の変化が、子どもとの

関係性を根本から変える力を持つ「いるこ」とに気づかれます。

不登校は「健全」なサインかもしれない

不登校シンポジウムでは、不登校を子どもが置かれた状況に対する「健全」な反応として捉えられる、という視点が提起されました。この視点に立つと、「いかにして学校に戻すか」ではなく、子どもたちの選択を尊重し、その子にとっての最善の学びの形を一緒に探していく。その重要性を改めて感じました。

障害の荷物を「小さくする」方法

「学級づくり」の講座では、ある参加者の「障害の荷物を小さくする方法がある」という言葉に感動した」という感想が印象的でした。

特別支援教育の目的は、本人が抱える困難という「荷物」の重さを、周囲の環境や仲間との関係性によって「小さくする」手助けをする」と。そして、そのた

めの最も重要な場の一つが、日々の学級です。仲間と互いの成長を感じ合い、励まし合えるクラスは、学習の場を超えて、一人ひとりの人格を形成する大切な居場所となります。大切にされる経験こそが、自己肯定感と他者への信頼を育みます。

子どもの目線で世界を見つめ直す

記念講演では、立命館大学教授で特別支援教育がご専門の三木裕和さんが登壇されました。講演を受けて、ある通常学級の先生は「通常学級にいるとどうしても『指導』の目線になってしまいますが、あらためてその講演になつてみると、その子の目線になつてみると、どうぞ大切にしていきたい」と感想を述べています。

自閉症の子どもたちが感じる世界、その不安や幸福感を本当に理解するためには、一度私たちの視点を手放し、子どもの目線で世界を見つめ直す「共感」の姿勢が不可欠です。

良かれと思って用いる「スケジュール」「構造化」「個別化」といった手法も時に子どもを追いつめてしまふ危険性があるといふ指摘もありました。大切なのは、まず子どもの心に寄り添い、世界がどう見えているのかを想像することから始める、ということなのでしょう。

あつまれば元気、語りあえば勇気、グチも磨けば要求に

女性部 フラワーアレンジメント講座 (12/24)
新春学習交流会 (1/10)



作品と一緒に記念撮影

全教北九州 ホームページ

新聞、要求書、権利パンフの閲覧等ができます。



フラワーアレンジメント
12月24日、組合事務所で黄金市場のお花屋さんに指導していただき、正月用のフラワーアレンジメントを楽

年で4回目です。この企画は今しみました。



女性部新春交流会

1月10日、市内で「女性部新春交流会」を開催しました。

市内で障がい福祉サービスなどを展開している「創造館」が販売しているお弁当や「洋菓子のカワグチ」のアップルパイでお腹が満たされ、一人ひとりの近況を聞いて心も満たされました。それぞれの職場でいろんな工夫もされ、このように繋がつていける嬉しさを感じた時間となりました。「集まれば元気、語りあえば勇気」がテーマのこの交流会。今年も元気をもらいました。

新春交流会参加者全員で記念撮影